

ロバート・ブラウニングの『ソルデロ』と1830年代イギリス政治について

鈴木理恵子

1. ロバート・ブラウニングの『ソルデロ』紹介

1840年に出版された『ソルデロ』はその難解さで有名であるが、その背景には、一見物語詩という形式をとりつつもブラウニング自身が詩の中で、政治的、思想的、文学的側面において自らの立場を試行錯誤していることが大きな原因として挙げることができる。例えば、詩人が社会とどう関わるべきであるとか、エリート主体から民衆主体の社会へと移行した場合、それに伴う文学のあり方について、詩人としてのアイデンティティや詩人が扱うのに相応しいテーマや文体について、また、それに呼応する形での詩的ジャンルについて、と実に多岐にわたる考察がみられる。ここで特に注目したい点は、1) 詩の中で政治的漸進主義を最終的に掲げているが、そこに到達するまでの過程について、2) 民主的志向に関する言及、3) コミュニケーション手段の重要性についてである。

2. 1830年代イギリス政治

1832年に最初の改正法が実現するのであるが、その前後において、イギリス政治がどのような動向を示していたか、またウィッグ党、急進派、保守党との間でどのような駆け引きなり反発といった動きが見られたか概観する。また、急進派において、特に哲学的急進派に着目する。ジェレミー・ベンサムとジェームズ・ミルを中心に形作られた政治的思想の内容に言及しつつ、1830年代において、哲学的急進派と呼ばれるようになった政治家達のマニフェストについて説明した後、ほとんどその内容が実現されなかった現実について説明する。その際、重要な要因として挙げられるのが、政治的組織作りを効果的に果たすことができなかつた点、掲げられた目標が1830年代イギリス社会にとっては早熟であった点、哲学的急進派と呼ばれる政治家の誰一人をとっても効果的な演説でもって議員を説得する術を持ち合わせていなかった点が挙げられる。

3. 『ソルデロ』に見られる1830年代後半イギリスの政治的動向との類似性

最初の共通点として、政治的漸進主義を掲げていることを挙げることができる。『ソルデロ』において、主人公ソルデロはローマに象徴される「共和制」を築き上げようとするが、それには段階を重ねる必要性があり、また、民度の向上を図ることによってのみ実現可能であるとしている。哲学的急進派達も義務教育の重要性を説いており、国民の教育が先行する必要があるとしており、個々人の努力も必要であるが、それ以上に集団ないしは社会構成員達の努力が必要であるといった、エリート主義から民主的アプローチへと移行が見られる点においても共通している。最後に挙げる点として、コミュニケーション力の重要性についても同じである。詩の中で、肝心な場面においてソルデロがギベリン党首を説得できないことは政治的に致命的であるとしており、また、同じく、哲学的急進派達が下院において効果的に意思を伝えられなかったことは批評家達に指摘される場所である。

4. 結論

『ソルデロ』のクライマックスとして、主人公ソルデロ、ギベリン党首を務めるサリングェッタとソルデロとの恋仲にあるパルマ間での心情的・政治的取引が破綻に終わる場面を挙げることができる。ローマノ家を代表することができる唯一残されたパルマとソルデロを結ばせることによって、ギベリン党の盛り返しを図るサリングェッタの策略はソルデロの死によって断念されるわけだが、その前の場面において、ロンバルディアにおける絶対的権力を示す飾帯をサリングェッタがソルデロに譲渡するという意味で投げた瞬間、お互いの関係を直感する。つまり、弓手の息子として育てられたソルデロはサリングェッタの実息子であったことをお互い知るのである。これはロマンスによく用いられるモチーフであるが、ここではブラウニングの手によって著しく異なる意味を持つことになる。つまり、ソルデロが思想的に進んでいると判断したゲルフ党にコミットする気持ちと、血縁関係にあるサリングェッタを初めとするギベリン党への忠誠心との間に生じる葛藤を劇的に描くための工作となっているからである。ここで注目すべき点は、実際のイギリス政治において見られた政治的妥協の重要性を説くのではなく、政治的権力に内在する根本的な問題をブラウニングが『ソルデロ』において提起した点である。実際、『ソルデロ』以降において、ブラウニングは権力譲渡を前にして尻込む数々の主人公を描いている。これは、ジョン・ウルフオード氏が言う所の‘embarrassment at power’であり、如何に理想を現実に具現化するかという課題に大きな影を投げかけているといえる。結局のところ、『ソルデロ』を通して、ブラウニング自身が得た自己認識とは、政治家としての力量や裁量という点に関心があるのではなく、また、詩を通して社会変革を試みるタイプの詩人でもないということであり、冒頭でも触れたように、詩自体が多岐にわたる自己認識への過程となっており、自らのアイデンティティを確認する場としての役割を果たしていると言える。